

## 朝日町宝ファイル No. 0604 「最上川舟運と五百川峡谷」

### 金比羅・象頭山信仰と舟運

朝日町長寿クラブ連合会で調査して発行下さった『朝日町の石佛』によると、朝日町には象頭山・金比羅権現の石碑が全部で22基ある。江戸時代末期に作ったものが多い。香川県琴平郡にある金比羅権現は、舟乗りや舟乗りに関係する人たちがその家族が信仰していた。最上川を下って、日本海の西廻り航路を通して江戸に行くにも大阪に行くにもそこを通る重要な経過点なので、安全航海するためや家内安全も含めて信仰していた。舟の仕事をする人がだんだん増えた証拠といえる。

### 最上川舟運の展開と特色

舟運が急速に発展したのは、江戸時代に全国が幕府により統一され、税金を重たい米で納めるようになってから。便利な川船や海船がどんどん使われるようになった。

最上川舟運開発の大きな出来事は、最上義光による碁点、三河の瀬、隼(村山市)の三難所開削。ここを砕く事により、山形から酒田まで通れるようになった。

数十年後の寛文年間には、河村瑞賢が西廻り航路を開発した。これが大きな出来事になったのは、起点が最上川河口の酒田だったから。それは、最上川流域に20万石近い幕府の領地ができ、税金としての米を江戸まで運ばなければならなかったため。海のルートも最上川のルートもしっかりしたものが必要だった。

### 元禄時代の最上川舟運とその後

元禄時代に、最上川舟運に米沢藩の参画があった。寛文年間まで、米沢藩は置賜地方と福島に30万石を持っていた。しかし、寛文四年に15万石に減らされ、今の福島県分がなくなってしまった。これにより、それまで江戸に米を出す場合は、福島へ陸送して阿武隈川から東廻り航路で運んでいたのを、最上川を通すようにしなければならなくなった。通るようになったのが有名な西村久佐衛門の開削だった。西村は米沢藩の御用商人。自らも多額な投資をして五百川峡谷を開削した。

五百川峡谷にはおそらく、それまで作業用の舟や渡し舟はあっても、左沢まで一貫して通る船はなかった。

開削のおかげで常時川船が通れるようになった。これは大きなこと。ここだけでなく、中流、下流まで通ったのだから、最上川全体にとっても大発展だった。この五百川峡谷開削は大革命だったと言える。

最上川船請負差配役は、いろんな人が所有している川船をうまく動かすために全体を統括する人のこと。享保年間からはじまり寛政年間の60~70年位続いた。ただ、最終的にはかなりの困難をきたし、差配役だけでは任せられなくなり、川船役所を作った。差配役と幕府の役人と両方で川船の統制をやって乗り越えた。

その頃、米沢藩では御手船(大名の船)を作った。上流は小鵜飼船だった。小鵜飼船は左沢からは下っていけない。左沢から下流の酒田まではひらた船(艀、平田)だった。寛政4年の記録では、小鵜飼船は100俵積み、50俵積み、あわせて60艘位が左沢から上流、五百川峡谷とか白鷹、長井の方まで上り下りしていた。

### 五百川峡谷の舟運

朝日町大舟木村の川船番所の管理は米沢藩だった。船数、怪しい荷物の取り締まり、規定以上の荷物の取り締まりなどをしていた。一石楯村(夏草)の大庄屋佐竹長右衛門家は、米沢藩の通船差配役をしていた。船子(水主)雇い、綱手道の管理、梁仕掛けの管理、破船の救出における人足割り当て、払い米の世話などの仕事をしていた。米沢藩の安全な通船を図る仕事をしていた。

(一部要約)



写真 最上川舟運図屏風 (宮坂考古館 所蔵)

詳しくは 財団法人 宮坂考古館 (米沢市東1-2-24 0238-23-8530)



### 横山昭男 (よこやま あきお) 氏

昭和5年10月山形県大石田生まれ。

昭和28年3月山形大学卒業。昭和35年3月東北大学大学院文学研究科修士課程修了。昭和45年より山形大学教育学部に勤務。講師、助教授を経て教授となり、平成8年3月退官。この間、山形大学教育学部附属小学校長、山形大学附属博物館長、同大学附属図書館長を歴任。現在、山形大学名誉教授・文学博士、山形県地域史研究協議会会長、山形文化財保護協会会長 その他。

主な著書 『上杉鷹山』(吉川弘文館) 『近世河川水運史の研究』(吉川弘文館) 『近世地域史の諸相』上、下(中央書院) 『羽州山形歴史風土記』(東北出版企画) その他 最新刊 『最上川舟運と山形文化』(東北出版企画)

※この他、「羽州川通絵図」(山形県立博物館所蔵)や、「松川舟運図屏風」(米沢市 宮坂考古館所蔵)の写真スライドで峡谷や舟運、村々の様子もご紹介いただきました。なお、詳しい講義資料はエコルームで複製致しております。